

二〇一二年 度

第一回 全統高2模試問題

国語

二〇一二年五月実施

(八〇分)

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は20ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(「受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。)
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の該当する解答用紙を切り離し、所定欄に **氏名** (漢字及びフリガナ)、 **在学高校名**、 **クラス名**、 **出席番号**、 **受験番号** (受験票発行の場合のみ) を明確に記入すること。
- 五、指定の解答欄外へは記入しないこと。採点されない場合があります。
- 六、試験終了の合図で右記四、の の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

人間だけが言葉を持っている、そう私たちは考えがちです。しかし、少なくともコミュニケーションの手段としての言葉ならば、多くの動物が(鳥類も含めて)持っています。ただ、これらの「言葉」は、「分節化」されていないこと、また「構成的」ではないこと、この二つの点で人間の言葉と異なります。

分節化とは、記号の連なりに、単位があることです。そしてこのことから生まれるのが「構成的」ということです。つまり分節化された記号の連なりは、それを切り離して、様々な形に新しく組み直すことができます、ということ です。「今日は」というグループは、「雨です」というグループと繋ぐこともできますし「火曜日です」というグループと組み合わせることもできます。こうして次々に新しい組み合わせを構成することができる。それが人間の言語の特徴ではないでしょうか。

そして、この事実は、私たちが接する世界との間にも、一つの対応関係を生みだします。「リング」は「丸い」とも「赤い」とも組み合わせられますが、「尖^{とが}っている」や「平べったい」とは組み合わせられません。私たちは、世界のなかに「リング」なるものを切り取ります。ちょうど自然光のスペクトルのなかのある部分を「赤」という言葉で切り取るように。それは、知覚する世界のなかに、ある「分節」を見出すことです。言葉の分節化は、実は世界の分節化と等しいわけです。そうして言葉によって分節化された世界を、私たちは知識の源にしているのです。

ここで判^{わか}ったことは、言葉はコミュニケーションの手段ではない、ということです。少なくとも

A

には、そうではない。

言葉は、私たちが世界をどのように認識するか、というその認識の枠組みを与える働きをするものです。そして、一つの言語が、一つの認識の枠組みを提供するのであれば、その言語を使う人々の間では、同一の世界認識が成り立ち、だからこそ、お互いのコミュニケーション(共通の理解)も可能になる、という仕掛けです。言葉は、先ずは、認識の枠組みを提供するものです。

¹ 人間の知識の根元は、言葉にあります。それは、知識の保存や、維持という場面よりも、より根源的な意味において、です。

言葉を学ぶことによって、私たちは、どのような世界を「知る」のかが決まるのです。そうだとすれば、先驗論は経験に先だって「知識の枠組み」が与えられているというわけですが、もちろん、言葉を学ぶ能力は先驗的に備わっているにしても、知識の枠組みは、誕生後どのような言語を学ぶか、によって変わるわけですから、B な性格のものとと言えることになります。しかも、一つの言語を自然な形で学んでしまうと、それは、あたかも先驗的に与えられた知識の枠組みのように（つまり、他の選択肢は存在しないかのように）、私たちの知識の世界を支配し統御することにもなります。

言い換えれば、自らが育った自然言語が与える知識の枠組みを、相対化することは、大変難しい作業だということです。

もちろん、言語が、人間の認識の枠組みを与えるとと言っても、その統御機能は、ある程度^a ユルやかなものです。同じ言語を持つ共同体の人々が、すべて同じ知識の世界を持っているわけではありません。そのうえ、私たちは、異なった言語を使う人々との間に、コミュニケーションを成り立たせることができることを知っています。同じ言語圏内では遥かに難しいとしても、です。そうした人間の「自由さ」というものを、どう説明したらよいのでしょうか。

私はそれを「寛容」という概念を使って考えたいと思っています。「寛容」というと、どちらかと言えば、C な場面を思い起こすのが普通かもしれません。他人の過ちには寛容でなければならぬ、などという使い方が一般的でし、ヨーロッパでは、近代になって「宗教的寛容」ということが徳の一つとしてシヨウヨウ^bされたものです。宗教的寛容というのは、当時はカトリックに対して、プロテスタントも平等に認める、あるいはさらに異教徒や無神論者も平等に扱う、という姿勢に対して使われた言葉です。

しかし、私がここで主張したいのは、このような「徳」としての寛容ではなく、²「機能的」な概念としての寛容です。それを説明してみましょう。

人間は、生まれおちたときに自分を育ててくれる共同体が必要です。そしてその共同体の言語を学ぶことによって、世界をどう理解したらよいか、その認識の枠組みを学びます。それは、個人の外にある、共同体の掟^{おきて}や習慣、秩序でもあります。古代ギリシャでは、そうしたものをノモスという言葉で呼びました。ここではそれを借りましょう。人間は、共同体のノモスを（主と

して言語を通じて）身につけます。それなしに、人間は人間たり得ません。しかし、個人には、そうしたノモスを受け入れるだけの容器がなければなりません。その容器は、単にノモスを受け入れるという働きだけをするものではありません。むしろ、Aのノモスを受け入れればAに、Bのノモスを受け入れればBに向かうことができるような、可能性を秘めたエネルギーのようなものだと考えましょう。それを、同じギリシャ語から借りてきた「カオス」という言葉で呼ぶことにしますと、人間は、外からのノモスと、内からのカオスとの間の、絶えざる拮抗作用のなかにあることになります。

つまり、共同体の持つノモスを全面的に受け入れる個人などはあり得ず、常に、ノモスから外れようとするエネルギーを多かれ少なかれ、個人は備えていることになります。しかも、一人の個人の生涯のなかでも、このノモスへの反発のエネルギーが強い時期もあれば、弱い時期もあります。また一つの共同体のなかでも、ノモスに寄り添って安定を得ることを目指す人もいれば、ノモスへの反発と、もっと他のようでありたいという欲求が勝っている人もいます。こうして、ノモスとカオスの均衡点は、個人のなかでも常に揺動していますし、共同体としても、転変ただならない状態にあるのです。

人間がこうして、共同体の与えるノモスに完全には制御されず、そこからはみ出る力、あるいは余裕を備えている、という事実を、私は「機能的寛容」という言葉で表現したいのです。

人間に本来的に備わっている（ここは先験的と言ってよいでしょう）この機能的寛容のおかげで、一つの共同体の構成員が、クローン人間のように、すべて瓜二つなどということとは決して起こらず、個人差が必ず存在するのです。またこの機能的寛容のおかげで、自分とは違ったノモスのなかに生きる人々を、少なくとも部分的には、理解するヨチ^cが存在することになります。

「寛容」に当たる英語は、通常〈tolerance〉です。先に述べた宗教的な寛容にも使える言葉ですが、「裕度」という訳語も与えられています。公的に定められた基準値からの許容範囲内でのずれ幅、といった意味です。似たような言葉に〈allowance〉があります。これも「^dシャクリヨウ」できる範囲」という意味です。例えば、

X

こと

などを指しています。人間のカオスは、ノモスに完全には従わないそうした「遊び」、「ゆとり」があることこそ、大事な点だと思えます。

こうして、私たちは、自分の生きる共同体にある程度は忠実に、しかし他の可能性に対しても開かれた存在であることが可能になるのです。

このことは、必然的に、知識の枠組みが、Dではなく、多様であること、言い換えれば、認識の多元主義を導くことになります。本来の枠組みにコシツすることなく、他の枠組みに移動することも可能になります。もちろん、その移動は、根底的な性格のものである必要はありません。仮に、移動してみる、という作業でもかまいません。しかし、そうすることによって、自らの認識の世界とは異なったものを、理解する可能性が生まれます。移動の対象は、異なる言語系の世界、いわゆる異文化ばかりとは限りません。^(注)「ダニ為的」な世界を想像してみることもできます。高周波の知覚世界を持つコウモリの「事実」を、推測することもできます。

人間の「知る」喜びのなかには、明らかに、こうした「異世界」への移動ということがあります。歴史書を読めば、異時間の世界に移動するわけです。外国の文学を読めば、たとえEにせよ、異世界を体験することになります。

こうして、私たちの「世界」は、限りなく「豊かに」なっていくます。福沢諭吉は、近代的な世の中で成功するために、「学問をすすめ」ました。しかし、広い意味での学問の効用は、まさに、このように、自分の世界を広げ、豊かにすることにこそ、あるのではないでしょうか。そして福沢も、その点に決して反対することはないと、私は思っています。

(村上陽一郎『あらためて学問のすすめ』)

(注) 「ダニ為的」……筆者は、本文のこの前の箇所で、「ダニ」ととしての「事実」は、「人為的」ならぬ「ダニ為的」なものだと述べている。

問一 傍線部 a↘e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 A ↘ E

を補うのに最も適当なものを、次のア↘クの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア 日常的 | イ 倫理的 | ウ 合理的 | エ 一義的 | オ 経験的 | カ 理性的 |
| キ 擬似的 | ク 普遍的 | | | | |

問三 傍線部 1 「人間の知識の根元は、言葉にあります」とあるが、それはどういうことを言ったものか。その説明として最も適当なものを、次のア↘オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 分節化された記号の組み合わせによって意味を構成することのできる言葉こそが、人間の認識の仕方を決定しているということ。

イ 世界を分節化して捉えるためには、それ以前の段階で、言葉によって記号の連なりを分節化しておく必要があるということ。

ウ 人間は自分が生まれた共同体の言語に支配されているのだから、認識の枠組み自体も生まれながらに存在しているというところ。

エ 言葉にコミュニケーションの手段としての役割はなく、あくまでも人間の世界認識を支えるものとしてあるということ。
オ 動物は言葉を分節化し構成的に処理することができないため、人間は認識主体として動物より優位な立場にあるということ。

問四 傍線部2「『機能的』な概念としての寛容」とあるが、それについての説明として不適当なものを、次のア～キの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア どんな人間にも、生まれながらにして必ず備わっている能力である。

イ 個人差を生じさせるとともに、自己を相対化する契機ともなり得るものである。

ウ 人間の認識や知覚では捉えがたいものを、直接に体験させるものである。

エ 自分の属する共同体の規範に完全に支配されることを、拒もうとする力である。

オ 自分と異なる認識を有する人とのコミュニケーションにとって、不可欠なものである。

カ 古代ギリシャ以来概念化された、人間のもつ可能性やエネルギーを表すものである。

キ 確固たるものに見える共同体の秩序を、内部から揺るがす働きをもつものである。

問五 空欄 X を補うのに最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ねじ穴を、ねじがちょうど収まる大きさに切るのではなく、楕円形に切っておく

イ 自分の足にぴったり合った靴を見つけるため、まずはいろいろな靴を履いてみる

ウ 子ども服は、子どもの成長に合わせて次々と買い換えられていくものである

エ 最近建てられたビルは、老朽化したときのことを考えて破壊しやすく造られている

オ 日本食ばかりにこだわるのをやめ、あえて外国の珍しい料理を食べてみる

問六 傍線部3について、「学問」が「自分の世界を広げ、豊かにする」とはどういうことか。八十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問七 本文の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 言語がコミュニケーションの手段になり得るか否かという点が、動物の言語と人間のそれとの最大の相違点である。

イ 人間の知識は先験的に与えられたものだが、言葉があつてはじめてそれを保存したり深めたりすることが可能になる。

ウ 同じ「寛容」という言葉を用いているが、「宗教的寛容」と「機能的寛容」は、その意味内容において交わるところがない。

エ 人間は常に、自分の属する集団の規範と、それとは齟齬^{そご}をきたしがちな内部の活力との間の動的な平衡のうちに生きている。

オ 人間の言語や認識のあり方を考察すると、近代において福沢が推奨した学問のすすめはそのまま現代にも通用することがわかる。

二 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

ぼくはきわめて A な、読書の実用論者だ。ただ楽しいからおもしろいから本を読み時を忘れ物語に没入するということは、ぼくにはまるでない。未来において「何か」の役にたつと思うから、読むのだ。「贅沢ぜいたくな読書」や「文学の楽しみ」といった考えほど、ぼくに無縁のものはない。

読書とは、一種の時間の循環装置だともいえるだろう。それは過去のために現在を投資し、未来へと関係づけるための行為だ。そこでもっともあからさまに問われる能力は、結局、記憶力ということになる。記憶力とは、流れをひきおこす力だ。過去が呼びだされ、その場に現在するテキストを通過して、ものすごい速さで予測される未来のどこかへと送りこまれてゆく。この加速力こそ読書の内実にはかならない。

ところが、ああ、われわれの記憶力ほどあてにならないものもない。読書という、記憶がすべてである領域でさえ、その土台は鯨くじらの背に乗ったようにぐらぐらと揺れてやまない。すぐれたフランス文学者だった渡辺一夫は、次のような楽しくも

B な思い出を記している。

ある日のこと、先生は朝から古いフランス本を開いて、あるページをじつと見つめている。まるで進まないの、今日はこのページと討死することになる、と覚悟を決めながら。本には注がいっぱいあり、その中にラテン文の引用がある。それがわからないと本文の意味も、なんだかよくわからない。ところが先生は、あまりラテン語が得意ではないのだ。同僚の専門家にたずねるにせよ、電話でたずねるには文が長すぎる。仕方ないから明日学校でうかがおうと、その文を紙に書きとつてみる。この一件は、これでいちおう棚上げ。しばらく油を売ってから、ともかく先にすすむことにする。二行ばかりすすむと、「A氏著B第C頁参照」という注がついている。この注自体にはあまり意味があるとも思えない。よく似た用例をあげてある程度だろうと見当をつけるのだが、ちょうどそのBという本を手元にもっているの、ともかくも

指定された頁を開いてみると、全然、該当箇所がない。何たる注だろうと思って憤慨しているうちに、ふと気がついたことは、初め用語上の問題だけだと思っていたのが見当違いであり、文章の意味内容の説明とも関係があるかもしれないということだった。そこで、Bという本を二、三頁前から読み始め、指定された頁をすぎ、次の頁を開くと、そこには、K教授に質問しようと思って、別紙に書きつけたラテン語文がちゃんと出ているし、何たることであろうか、いつ書きこんだものか判らぬが、僕の筆跡で、そのフランス語訳が余白に鉛筆で記されていたのである。僕の心臓は、若々しく高鳴り、文字通り、貪る^{むさぼ}ようにして、昔書きこんだ訳を読んだ。すると、前に棚上げをして通過した箇所も何とかわかるようになり、全く霧が晴れたような、奥歯にはさまっていたものがとれたような、すがすがしい気持ちになった。しかし、仮綴^{かりと}じがこわれかけたBという本を撫^なでながら、「己は昔この本から、一体何を読みとっていたのであろうか？」と自分に問いかけざるを得なかった。昔読んだことを全く忘れていたのである。読まないのと全く同じ結果になっているのである。

（渡辺一夫「本を読みながら」）

思わず、こっちも顔がほころぶ。読んだ本の大部分が読まないのとまったくおなじ結果になっているのは、ほくもおなじだ。一九五五年執筆というから当時五十四、五歳だった碩学^{せきがく}は、この挿話^{そうわ}から「読書＝フィルム現像説」へと展開させる。本が現像液で、感光したフィルムである読者はそれに浸されてそのときどき、その年齢ごとに読者自身もつ影像を浮かび上がらせるにすぎない、という説だ。おなじ本でも読むごとに、読めるものがちがう。それなら

X、とい

う理想の境地も、論理的必然として予想できる。

（注1）
ヴァルター・ベンヤミンは、いつのころからか、自分が読んだ本に通し番号をつけていた（ということをどこかで読んだ）。本

に関してはマニアックなやつだったので、
Cにも読みもしない本に番号をつけるようなまねはしなかった（と書いてあったような気がする）。その番号は彼の死にいたるまで着実にふえてゆき、たしか千七百冊とか、そのへんの数字になっていた（まったく断言できないが）。まだ学部学生のころの話だが、その数をなんだそんなものかと思ったことを覚えている。というのも

(注²)

レヴィーストロー스가一冊の本を書くためには七千冊の本に目をとおすところはどこかのインタヴューでいつていたのを覚えていたからで、この数の差は端的にいつて文芸批評家と人類学者がおなじ「本を読む」という表現でどれほど異なつた事態をさしているかの証言になるとそのとき思つた。ぼくも長いあいだ、本は表紙から裏表紙まで読むもの読みたいものと考えて、その考えが災いして結局大部分の本は背表紙しか読まない結果に終わるのがつねだった。何かがまちがつている。ぼくは考えを変えることにした。本に「冊」という単位はない。あらゆる本はあらゆる本へと、あらゆるページはあらゆるページへと、瞬時のうちに連結されてはまた離れることをくりかえしている。一冊一冊の本が番号をふられて書棚におさまつてゆくようすは、銀行の窓口に辛抱強く並ぶ顧客たちを思わせる。そうではなく、整列をくずし、本たちを街路に出し、そこでリズムカルに踊らせ、あるいは暴動を起こし、ついにはそのまま連れだつて深い森や荒野の未踏の地帯へとむかわせなくてはならないのだ。そんなふうに関連的・運動的に、さまざまな本から逃げだしたいろんな顔つきのページたちを組織する。それが「テキスト」であり、時間の経過の中ではじめて編み上げられてゆく「テキスト」という概念は、もともと運動的なものだ。

本に「冊」という単位はない。とりあえず、これを読書の原則の第一条とする。本は物質的に完結したふりをしているが、だまされるな。ぼくらが読みうるものはテキストだけであり、テキストとは一定の流れであり、流れからは泡が現れては消え、さまざまな夾雑物^{きやくざつ}が沈んでゆく。本を読んで忘れるのはあたりまえなのだ。問題なのはそのような複数の流れの合成であるきみ自身の生が、どんな反響を發し、どこにむかうかということにつきる。読むことと書くことと生きることはひとつ。それが読書³の実用論だ。そしていつか満月の夜、不眠と

D

に苦しむきみが本を読めないこと読んでも何も残らないことを嘆くはめ

本は読めないものだから心配するな。

(管啓次郎『本は読めないものだから心配するな』)

(注) 1 ヴァルター・ベンヤミン……ドイツの文芸批評家・思想家(一八九二―一九四〇)。

2 レヴィーストロース……フランスの文化人類学者(一九〇八―二〇〇九)。

問一 傍線部1・2と同じ意味の言葉を、次の各群のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 碩学					2 挿話				
ア	専門家	イ	大学者	ウ	知識人	エ	学究の徒	オ	博学多識
ア	モノログ	イ	フィクション	ウ	ゴシップ	エ	エピソード	オ	プロローグ

問二 空欄 A 〽 D を補うのに最も適当なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ただし、同じものを二度以上用いてはならない。

ア 憂鬱 イ 潔癖 ウ 繊細 エ 焦燥 オ 偏狭 カ 忸怩^{じくじ}

問三 空欄 X を補うのに最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 時がたてばたつほどに、一冊の本の世界に没入することを容易^{たやす}くしてくれる
イ 一冊の本に内蔵された富は、どこまでも自動的に増殖していくにちがいない
ウ 数多くの本に触れる体験は、個々人の内面世界を豊かなものにしていくだろう
エ 一冊の本でも、自分が変わり成熟すればするほど永遠に新しく読めるはずだ
オ 時が人類共通のものであるように、本のもたらす価値は普遍的なものである

問四 波線部（三カ所）についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 渡辺の愉快な思い出に対抗するかのように、同じ内容の感想を繰り返すことで、文章にユーモラスな味わいを添えようとしている。

イ 読んだ本の内容を正確に覚えていなくても支障はないという筆者の思いを、自らの文章において具体的に示そうとしている。

ウ それまで述べてきた記憶の不確かさを示す話を即興的に作りあげること、読者の興味を引き、自説を効果的に伝えようとしている。

エ ベンヤミンの考え方に共感できないため、ベンヤミンの本の内容や彼の読書法に対して皮肉を述べようとしている。

オ ベンヤミンの本の内容を覚えていないことを率直に示し、その本が役立つかどうかについての判断は読者に委ねようとしている。

問五 傍線部3「読書の実用論」とあるが、これは読書のどういうあり方を言ったものか。本文の論旨を踏まえて、百字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問六 本文の内容に合致するものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えよ。

- ア 筆者は、過去の想起を可能にする点で読書における記憶力の役割を高く評価している。
- イ 筆者は、本を最初から最後まで読むことに過剰な意味を見いだす必要はないと考えている。
- ウ 渡辺によれば、書物は読者の抱えもつその時々の問題意識を明確にしてくれるものである。
- エ 渡辺によれば、読者が関心を持ち得ない書物は理想的な境地を目指すものとは言い難い。
- オ ベンヤミンとレヴィーストロースの読書量の違いは、読書のあり方とは無縁の事柄である。
- カ ベンヤミンとレヴィーストロースの読書量の違いは、読みの精密さの違いを示している。

三 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

南都なんとの春乗坊しゅりやうぼう上人じやうにん、東大寺の大仏殿造立だうぶつだんぞうりつのために、安芸あき、周防すおう両国の山（注一）にて、杣造りそうぞうりせさせて、その間の食物じきもののために、俵たはら多くうち積み置きたりけるを、ある時、俵を盗みて逃げける者を見つけて擲からめてけり。瘦やせ枯かれたる童わらはにてぞありける。

上人、「いかなる者にて、かかる不当のわざをばして、仏物ぶつものを犯（注二）すぞ」と問はれければ、童申しけるは、「いふかひなく貧しき者にて、過ぎ嘆なげき侍るうへ、盲目なる老母の一人候さうらふを、薪たきぎを取りて、はるかなる里に出いでて、物を乞こひて、養はぐひ育はぐみ候へども、身も疲れ力も尽きて、はかばかしく助け過ぐることも侍らねば、この杣じまの食は多く候ふ、仏事ぶつじなれば御事おんことも欠けず、尽あくすることあらじと思ひて、少分せうぶん盗みて、母を助けばやと思ふばかりにて、かかる不当をつかまつりて、恥1をさらし候ふこそ、口惜しくおぼえ侍べれ」とてさめざめと泣きけり。

上人も事ことの子細しさいあはれにおぼえければ、実否じつふを知らんがために、この童をば召し置きて、別の使つかひをもて、童が申し状に付きて、母が居所きよしょをたづねに遣つかはしけり。使、尋ね行き見ければ、山の麓ふもとに小さき庵いほりあり。人のおとなふ声しければ、立ち寄りて、「いかなる人のおはするぞ」と問Bふに、答へけるは、「わび者の、盲目にて侍るが、過ぎわびて、この山の麓に住みて、薪を取り、里に出でて、物を乞ひて育む子息しそくの童の候ふを頼みて、露3の命、さすがに消えやらで侍り。この童、昨日出でしまにて、見え侍らねば、おぼつかなく、心もとなくて、人のおとなへば、『この童にや』と思ひ侍りてあれば、あらぬ人にこそ」と言Cふ。

使、急ぎ帰かへりて、上人にこの様ようを申しければ、「童が言葉に違ちがはざりけり」とて、あはれに思はれければ、母養5ふほどの食物を給たびてけり。さて、仏物なれば、いたづらに与へんもおそれありとて、杣造りの間は、童をば召し使ひけり。

仕業しわざは不当なるに似たれども、 まことにありがたければ、しかるべき三宝さんぼうの御恵おんめぐみにや。母養ふほどの食物にあづかりけるこそ、かへすがへす不思議におぼゆれ。 これは、 まことにある故ゆゑにこそ、冥みやうの御あはれみもありけめ。

(注) 1 杣造り……寺社などが、建築用資材を伐採するための山林から、木材を伐り出すこと。

2 仏物……仏に属するべき物。

3 三宝……仏・法・僧の三つを尊んで言う言葉。

4 冥……目に見えない神仏。

問一 二重傍線部 a～e の用言を、終止形に直して答えよ。

問二 波線部 A～D の主語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 上人 イ 童 ウ 使 エ 母 オ 作者

問三 傍線部 1 「かかる不当をつかまつて」とは、どのようなことについて言っているのか、具体的に説明せよ（句読点とも十一字以上二十字以内）。

問四 傍線部 2 「おぼえければ」・4 「心もとなくて」を、それぞれ現代語訳せよ。

問五 傍線部 3 「露の命、さすがに消えやらで」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 露のように残りわずかな命が、今にも消えてしまいそうに

イ 露ほどの取るに足りない運命を、やっとのことで保ち続けて

ウ 露のようなつまらない人生が、いつのまにか終ってしまい

エ 露のようなはかない命だが、それでもやはり生き長らえて

オ 露のような涙の絶えない人生だが、見事に消え去ることもできず

問六 傍線部5 「母養ふほどの食物を給びてけり」とあるが、上人がそのようにした理由をわかりやすく説明せよ。

問七 二つの空所には、同じ語句が入る。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 遁世とんせいの志 イ 報恩ほうおんの志 ウ 孝養けうやうの志 エ 憐憫れんびんの心 オ 悔恨くわいこんの心

問八 『沙石集』と同じジャンルの作品として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 千載和歌集せんざい イ 方丈記 ウ 山家集さんか エ 発心集ほっしん オ 太平記

国語の問題は次の頁へ続く。

〔四〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で、送り仮名を省いたところがある。）（配点 四十点）

吾郷有ニ蔡翁ナル者。家甚貧、為人傭工。家中僅種田一二畝、以此為食。父母死後、尽築為墓。負土成封、植以松楸、且編籬。以衛之。見者莫不窃笑。其貧如故也。隔二三年、松楸漸長、松下時出鮮菌、郷人謂之松花菌。日出不窮。每朝持一二筐入市上、売得数百文。如是者十余年、積資千金、以之買田得屋。

（注）

- 蔡翁……人名。
- 傭工……雇われて働く。
- 種田……耕地。
- 畝……面積の単位。一畝は約六アール。
- 為食……生計を立てる。
- 封……盛り土。
- 松楸……松とヒサギ。
- 編籬……垣根を作る。
- 鮮菌……きのこ。

（『履園叢話』による）

○簞……箱。
○千金……大金。
○屋……家屋。

問一 傍線部⑦「甚」、①「尽」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。

問二 傍線部①「見者莫_レ不_ニ窃笑_一」を書き下し文に改めよ。

問三 傍線部②「其貧如_レ故也」を現代語訳せよ。

問四 傍線部③「長」と同じ意味の「長」を含む熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 長久 イ 長所 ウ 成長 エ 年長 オ 深長

問五 傍線部④「日出不_レ窮」の解釈として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 蔡翁は毎日休むことなく市場に出かけた。

イ 蔡翁は夜が明けるといつも墓参りに出かけた。

ウ 人々は毎日休まずきのこを採りに出かけた。

エ きのこは日の出とともにしおれてしまった。

オ きのこは毎日生えて尽きることはなかった。

問六 傍線部⑤「買_レ田得_レ屋」とあるが、「蔡翁」はどうしてこのようにすることができたのか。五十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

